

第1回 ナショナルパーク・サミット

”自然と人が紡いできた地域の魅力で、世界に誇れる五感ふるわすまちづくりへ！”
～地域の資源をONSEN・ガストロノミーで世界の宝に～

(1) 開催結果概要

① 挨拶（*市長は急用により不在）

・雲仙温泉観光協会 宮崎 高一様

国県市の強い連携により、地域一丸となって協同的復興を目指したいという強い思いとともに、日本で最初の国立公園のひとつである雲仙天草国立公園の魅力や歴史の紹介を頂戴しました。また、本日を皮切りに各地域が連携し、ますます発展することを祈念してのあいさつを頂く。

・ON ガス機構 理事長 小川 正人様

豪雨災害の犠牲者の方々への追悼と、サミット開催に尽力した関係者への謝意を述べるとともに、ONSEN・ガストロノミーウォーキングイベントの開催趣旨や進捗、さらには雲仙・小浜温泉にて連日開催されたイベントの素晴らしさを話されました。



② 雲仙市における取組発表（雲仙市役所観光物産課 各担当者）

・雲仙市の概要

農業と観光が主幹産業である（イチゴ・ジャガイモ・ブロッコリー、有機・伝統・希少野菜などの多種多様な品目、畜産業、漁業も多様な物産を誇る）

島原半島世界ジオパークに日本初認定、日本一長い足湯もある素晴らしい湯を含む、日本一・世界一の歴史多い地域である

島原温泉、雲仙温泉、小浜温泉と大きく異なる泉質の温泉もある

オープンイノベーションによる異業種交流も盛んになっている

・食と人による雲仙のブランディングとしての「雲仙を食べるプロジェクト」

農業と観光の二大産業の連携不足、プレーヤー・ノウハウ不足といった課題を解決するため、「食」に関わる多様な「人」が一同に会するマルシェや天幕レストランの開催を進めつつ、雲仙野菜のブランド化、ふるさと納税への導入による PR の加速を展開。生産地や生産者を訪問する機会も創出。

・オープンイノベーションの推進

雲仙小中学校の廃校を活用した雲仙 BASE の整備。ノウハウの集結を目指し、内外交流促進に向けた交流コンシェルジュを配置するとともに、ワーケーションのみならず、親子イベントの開催など地元の様々なプログラムも展開できる、オープンイノベーションの拠点施設として活用。ワーケーション施設の認証制度の検討も進められている。

・雲仙市観光戦略、2020年6月に始動

雲仙市の一体的な価値向上、さらには、島原半島とともに「6日間滞在できる雲仙」を目指し、変化を厭わない全体構想を策定。その一大事業のひとつが、DMO「雲仙観光局」の立上げによる総合的な観光活性。

・ストーリー性ある特産品の新開発

雲仙市観光戦略ワーキングを通し「産官学」連携メニューとして開発された「雲仙ジオバーガー」。特産品をふんだんに使い、観光と農業が連携したプロジェクトの一環として期待。

・観光満足度の向上のための美観推進

民間事業者による外観改善、雲仙温泉地獄の配管整備など、国立公園利用拠点上質化事業も活用して推進。

③ 雲仙の地域事業者からの取組発表

・雲仙つむら農園 津村義和様（動画にて、実際の農産物を見せつつ紹介）

季節ごとに五感で味わえる「種どり野菜」の魅力を最大限引き出せる有機農業の紹介。循環型農業に不可欠なコンポスト等や、野菜を通年作れる気候条件の雲仙のポテンシャルの高さを説明

・雲仙福田屋 料理長 草野玲様

長崎の肉、魚、野菜、特に島原半島の宝物のような食材の発掘に尽力。今流通する野菜の1%にも満たないといわれ、その場所でしか生まれない・昔ながらの「種どり野菜」を積極的に利用。料理は技術で何とかなる、という意識から、様々な方との出逢い・素材が8割・腕が2割という言葉により、素材・野菜を活かす料理に魅了され続けている。コロナ禍に対応しテイクアウト弁当「雲仙お山の峠みち」などの開発、天幕レストランに積極的に参画、福田屋ファームも耕作中。

・ゆやど雲仙新湯 豊田桐子様

長崎、東京を経て、約30年ぶりにUターン、昨年より旅館業に携わる。マイクロツーリズムの主流化にも順応しつつ、食品ロス・コンポスト・プラスチックごみ削減などのSDGs推進、地産木材の利用をはじめとする地産地消、さらには、コロナ禍で注目される「持続可能な観光」に向け、島原半島全体を満喫してもらう“15マイル宣言”の一環として地元を紹介するオリジナルガイドブックを制作。全ての取組は、リピーター化・長期滞在化、お客様自身の意識向上に繋がっている。



④ 各地からの取組発表

●下呂温泉観光協会 会長 瀧康洋さま

「地域活性化に向けた各種取組について」

岐阜県の真ん中、下呂市の概要・アクセス等の紹介。H30年度、下呂市エコツーリズム全体構想が温泉地としては初めて国から認定された後、日本SDGs協会から14事業について認定を受け、R2~3年度には観光庁重点支援DMOにも選定された下呂市E-DMOの取組を紹介。観光振興の目的を「全ての地域住民の豊かな生活の質の向上を目指す」と位置付け、観光振興・地域振興・環境保全のエコツーリズム・トライアングルを信条に掲げ、ミッションとビジョンを持ち、利害関係者との合意形成しながら事業を発展させている。地区ごとのキャッチコピーの創出など、地域の宝を探し、戦略的なプロモーションを進め、一元化したマーケティング・マネジメントして次の一手を考える、という持続可能な戦術の重要性を話す。

●稚内観光協会 事務局次長 大野忠治さま

「地元住民を巻き込んだ人材育成と魅力発信など各種取組について」

日本のおてっぺん、稚内市の概要・アクセス等の紹介。利尻礼文観光の中継地でなく、立派な観光地であることをPRすべく、インフォメーションセンターBASE-SOYAの整備、レンタサイクルの開始、サイクルバスの試験運行など、滞在型観光の推進に向けた様々な取組みを展開。稚内ブランド認定食材も豊富で、これら「稚内の食」を活かし、レストラン・居酒屋・菓子店など地元店舗がオリジナルメニュー等を提供する「おてっぺんの逸品」事業により、観光客がこの地で食の旅に出られる機会を提供。中央商店街の縮小により、観光客の夕食・昼食難民化の解決に向け、今後も新た

なブランディング事業を検討する。

●層雲峡観光協会 事務局長 中島慎一さま

「地域活性化に向けた取り組みについて」

層雲峡の概要・アクセス等の紹介。上川町の半分以上が大雪山国立公園。H9～13年度、商店街、ビジターセンター、駐車場等を再整備し、山岳リゾートのような景観を目指した経緯あり。現在は、当時と異なる店舗が増えてはいるが、地元の方々や新しく設立された DMO である大雪山ツアーズと連携し、上川アイヌ伝統儀式も披露される峡谷火まつり、夏花火、日本一早い絶景の紅葉、奇跡のイルミネート、氷瀑まつり、更なる活用に向けた雪のサバイバルゲームの開催など、魅力溢れる企画が繰り広げられている。アクティブ・アウトドアブームとともに各企業等との連携も図られる一方、登山道の維持保全のための協力金を設置するなど、持続可能な自然観光を今後も展開する。

●奈良県庁観光局 MICE 推進室 主任主事 瀧剛樹さま

「奈良県のガストロノミーツーリズム推進に関する取り組みについて」

奈良県観光戦略に基づき、観光にとって“美味しい食”は不可欠、という視点から、食の振興を図る。「なら食と農の魅力創造国際大学校」（奈良県農業大学校を再編、2016年開校）との連携や、認定店を冊子にまとめた「ぐるっとオーベルジュなら」の発行なども展開。R4.6.13～15に予定される第7回 UNWTO ガストロノミーツーリズム世界フォーラムでは、前回のベルギー大会からの繋がりを大切にしながら、「奈良に美味しいものなし」と評された過去を覆すべく、奈良ひいては日本の食の魅力を世界に大きく発信する。

●JR 東日本 久保田基義さま

「「浄土平 天空のガストロノミー」国立公園の大自然と食による観光コンテンツ創出について」

JR 東日本では、圧倒的な魅力、希少性・限定性のある、そこでなければ体験できないコンテンツ創出により、新たなターゲット層を取り入れるべく「国立公園プロジェクト」を始動。その第一弾として、磐梯朝日国立公園の絶景とともに絶品フレンチを楽しむ天空プレミアムディナーを企画販売、残念ながらコロナで中止となったが 25000 円という値段設定でも満員御礼だった。ガイド付きの浄土平湿原の散策、ビジターセンターでの学習、星空観察会などを通して地域を知る時間もあるコンテンツ。環境省所管のビジターセンターを貸し切った開催という滅多にない機会を創出し、地域創生・国立公園活性化に貢献したい考え。

●岩手県庁流通課 主任主査 藤沢哲也さま

「「食」を核とした地域振興の取組について

～美味えがすと三陸-Gastronomy SANRIKU-構想推進プロジェクト～

日本一面積が多い県・岩手の著名人、美しく豊かな自然と多種多様な食の魅力を紹介。「食の宝庫」「酒の聖地」といえ、食にまつわる伝統工芸・郷土芸能も豊富。復興の先を見据えた地域振興、地域資源の活用事業として、ガストロミーを核とした取組を推進し、世界に誇れる地域形成を目指す。具体的には、交流の場である三陸国際ガストロミー会議の開催、県内外のシェフ同士のコラボ料理を提供する「美食サロン」、国内外の方々に産地を訪問し評価してもらう「食のキャラバン」から成る。ロレオール田野畑の伊藤シェフの多大な協力の元、国際会議運用のノウハウ蓄積、メディア等による効果的な広報、県内の若手シェフの積極的な参画など、様々な面で「食」を通じた地域振興に繋がった。一方、新型コロナの影響も受け、県外からの来訪や生産者・実需者とのマッチングの機会が減少したこと、漁協・農協など地元団体への波及や内陸部との交流が少なかったことなどが課題として挙げられた。

●ロレオール田野畑 代表/シェフ 伊藤勝康さま

「地域に根づくガストロノミーの真の魅力とは」

人と人との繋がりを一番大切に、生産者さんを実際に訪問する機会を作りたいと考え、国際ガストロミー会議のプログラムに取り込んだ。海水温上昇によるサケの漁獲量減少など、生きる根源である「食」の現状を考えれば、我々・次世代の未来のために、本当に腹を据えて環境問題に目を向けなければならないことは一目瞭然で、SDGs といった言葉がなくとも、当然の行動に繋がっている。

畠山 重篤氏の言葉「森は海の恋人」を例に、全ての結びつきを様々な側面から考え、自ら行動することの重要性を話す。岩手県には、伝統料理を作るおじいちゃん・おばあちゃんを「食の匠」と称え、食文化の伝承を推進する制度があるが、匠の高齢化が著しい。ガストロミ-会議という一大事業に取り組む一方、フレンチを含め世界の料理の根源である郷土料理が薄れていくことへの懸念もあり、東京で食べられないものを提供できる機会作りを目指し、匠の方々と計画を練っているところ。



⑤ 意見交換会

「世界に誇れるまちづくりに向けて」と題し、来場者・参画者の方々が、これまでどのような課題をどう解決し、事業展開され続けてきたかを情報共有・意見交換し、共通項となるブレイクスルーポイントがあれば、今回のようなプラットフォームの創出も含め、サミット宣言として諮ることとした。

波佐見町観光協会から、コロナ対策として通年の平準的な誘客を図ることで、来訪者・受け皿の両者にとってメリットある観光形成が可能となったとの提言があった。その他、地元住民の賛同・参画ある広域観光連携に向け、各地の徹底したマーケティングの重要性についても議論された。

マーケティングやプロモーションを含め町づくりにおいて、若者の意見・スキルを取り入れる柔軟性を有するべきという考えには、様々なイベントを企画する層雲峡観光協会、若手の意見から浄土平ディナーコンテンツを創出した JR 東日本をはじめ、全員が納得していた。さらに岩手県庁からは、一次産業従事者になろうと U ターンする若者と地域とを結びつける「パイプ役の存在」によって、若者ならではのスキルの最大活用、住民や料理人に発信する機会の確保へと繋げられ、地元自身が誇りに思う地域作りの人材育成・担い手創出になる、と前向きな意見もがあった。霧島市から、市の職員提案制度により正にボトムアップで実現に至ったガストロミ推進事業の展開、特に、ガストロミ推進協議会の運営、地域ブランド認定制度による地域振興について紹介された。

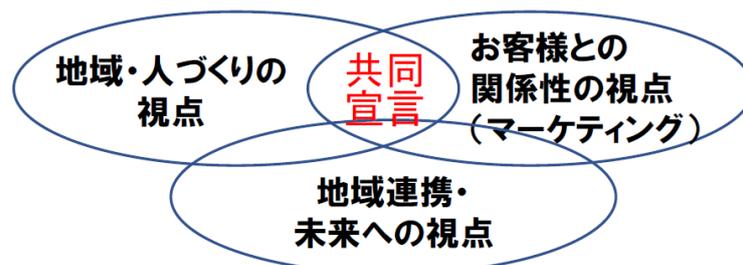


①
失敗や課題を
乗り越えた
ブレイクスルーの
ポイントは？

②
「守る」「活かす」
「伝える」「育む」な
どが繋がる
ポイントは？

**世界に誇れるまちづくりのヒントに！
最終的に『共同宣言』としてまとめます！**

第1回 ナショナルパーク・サミット共同宣言



地域・ひとづくりの視点	お客様との関係性の視点 (マーケティング)	つながり・継続・未来の視点
私たちは、訪れる人も、住む人も、働く人も幸せを感じられる持続可能な地域づくりを進めていきます。	私たちは、食や温泉など、地域ならではの多彩な魅力に光を当て、磨き上げ、玉手箱のように輝き続ける地域を、国内外に伝え続けます。	私たちは、国内外の多くの仲間とつながり、その輪を広げながら、未来に向けてともに歩み続けます。

⑥ サミット宣言

第1回ナショナルパーク・サミット共同宣言は、以下の通りとなった。

日本各地では、古くから自然と人の暮らしが紡ぎだして来た信仰・知恵・文化などの資源が、大切に守り育まれてきました。特に、国立公園をはじめとした日本が誇る自然豊かな地域には、地方の個性と魅力あふれる資源が色濃く残っています。そこで、全国から、自然・文化の賜物である食・温泉などの魅力向上やその魅力を伝える人づくりを实践する地域が集まり、情報交換し、今後の、世界に誇れるまちづくりについて語り合うため、雲仙市において第1回ナショナルパーク・サミットを開催しました。

第1回ナショナルパーク・サミット in 雲仙を契機に、私たちは、相互に連携を図りながら、次の取組みを進めることを確認したので、これを宣言します。

1. (地域・人づくりの視点)

私たちは、地域ならではの自然の恵み・人の暮らし・食の魅力を大切に、守り・活かし・育み・伝えることを通じて、訪れる人も、住む人も、働く人も幸せを感じられる持続可能な地域づくりを進めていきます。

2. (お客さまとの関係性・マーケティングの視点)

私たちは、食や温泉など、地域ならではの多彩な魅力に光を当て、磨き上げ、玉手箱のように輝き続ける地域を、国内外に伝え続けます。

3. (つながりの視点、継続の視点)

私たちは、国内外の多くの仲間とつながり、その輪を広げながら、未来に向けてともに歩み続けます。

今回を機に、交流や情報交換・意見交換を継続し、第二回、第三回と、回数を重ね、日本の地方が、元気な日本の原動力になっていく、そんな将来につながる第一歩になることを願っております。

第1回ナショナルパーク・サミット in 雲仙 参加者一同

⑦ 最後の挨拶（雲仙観光局設立準備委員会 事務局 相良淳郎様）

第一次産業と観光の連携を志し、各地の特色を活かした取組をされている方々との出会いに感謝。郷土愛を持ち、常に、地元をどう活性化できるかを考えていくことになると思う。今後も是非、情報共有・意見交換させていただきながら、共に発展していけることを願い、挨拶とする。



(2) サミット参画者

新型コロナ対策として、ONSEN・ガストロミーツリズム推進機構の会員団体や、雲仙市の関係機関への周知及び声掛け、(株)旅行新聞新社のオンライン記事掲載等により、参画を促した。当日、(一社)波佐見町観光協会、阿蘇市経済部観光課、長崎県自然環境課・新産業創造課、(一社)長崎国際観光コンベンション協会、(一社)島原半島観光連盟、ながさき食べる通信などのご担当者様に来場いただき、霧島市商工観光部観光 PR 課のご担当者様には、霧島ガストロノミー推進協議会についてオンラインで紹介いただいた。その他、(株)ANA総合研究所、出光興産株式会社、(株)ぐるなび、(株)びゅうトラベルサービスなど、地方創生に関心ある事業者がオンラインで参加下さった。